

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月20日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520173

研究課題名（和文）

新聞メディアによる〈文学〉創造の総合的研究—『時事新報』文芸欄を中心に

研究課題名（英文）

Research of the literary creation by newspaper media/Aimed at-"Jiji Shimpo"

研究代表者

杉山 欣也（SUGIYAMA KINYA）

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：90547077

研究成果の概要（和文）：『時事新報』マイクロフィルム版（ニチマイ）を使用し、1927（昭和2）年期を通覧した。その結果、「文学」が広くメディア上に記述された「文化」全般との相関関係によって成立していることが理解された。そのため、「文化」関連記事一覧の作成を試み、同年1～3月にかけての文化関連記事を目録化して刊行した。また、同時期における一大文学／メディアイベントであったいわゆる「円本」に関する研究発表や、詩歌の動向に関する論文を発表した。

研究成果の概要（英文）：At first, we surveyed The "Jiji Shimpo" microfilm 1927 (Showa 2) periods. were surveyed. As a result, it was understood that "literature" is materialized by the correlation "cultural" widely described on media. Therefore, we tried creation of the "cultural" related article list, and we make lists of the cultural related article applied in January to March of 1927, and published. Moreover, the research presentation what is called about a "one-yen book" which was the big literature/media event in the period, and the paper about the trend of poetry were announced.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：時事新報、円本、詩歌

1. 研究開始当初の背景

近年の日本近・現代文学研究領域においては、文学作品や作家を取り巻く環境に関する研究が盛んとなっている。それは、テキスト論の登場以降、文学テキストが作家の才能に依存した「作品」であるという認識が薄れつつある一方で、読者や、作者と読者を媒介す

るメディアの存在を視野に入れて、流通の場に於いて流動し、生成される存在として文学テキストをとらえ直す気運が高まっているためであろう。

それは、たとえばP. ブルデューの〈文学場〉の概念などを参考にしつつ、〈文壇〉、〈ゴシップ〉、〈モデル〉、〈読者〉などをキーワードにした研究となって、日本近・現代文学の

研究領域に表れている。

しかしながら、その研究は明治～大正期を中心に進められており、昭和期に関する研究はようやくその緒に就いたところであって、進展と深化はこれからであるとも考えられている。

そこで、私たちは、その進展に寄与するために、昭和初期の新聞メディアの調査・考察を構想するに至った。

言うまでもなく、昭和初期の媒体には新聞のみならず雑誌、ラジオ、映画といったものがあり、それらについても徐々に研究は進展している。そのなかで、本研究においては『時事新報』という新聞に注目することとした。

『時事新報』については、池内輝雄の労作『時事新報目録 文芸篇 文芸篇』（2004年、八木書店）があり、この著作には、大正期の『時事新報』の、ことに文芸欄についての目録と、それをういた論考が収められており、それは高い達成を示している。また、この目録によって各種個人全集の精度が高まるなど、研究状況に対して大きな貢献を果たしている。

そのため、昭和期に関する目録の作成と研究の進展は、日本近・現代文学領域の幅広い層から従来より望まれているところであった。

さいわいにして、本研究代表者（杉山欣也）は『時事新報目録 文芸篇 大正期』刊行に際して再調査と新規データ採録の作業に従事した経験を有しており、その経験を生かせることから本研究の着手を準備していた。また、研究分担者（竹本寛秋）は詩歌を専門とする研究者であり、同時にコンピューターやデータベースの構築に関する該博な知識を有している。それらは研究代表者においては知識が不足しているところであり、両者で相補いあえば、よりよい研究ができると考え、研究グループを組織し、本研究に着手した次第である。

2. 研究の目的

「1」でも簡単に触れたが、本研究では、昭和初期を対象に、メディアと文学との相関関係を探るため、とくに新聞メディアに着目した。そのなかでも、『時事新報』という当時の有力紙を中心に据えることとした。

『時事新報』は明治1882（明治15）年3月、福沢諭吉の慶應義塾出版社から創刊され、昭和11（1936）年12月に『東京日日新聞』に合併された日刊紙である。「文芸欄」は1909（明治42）年12月に設けられ、以後ほぼ毎日継続され、廃刊となる1936年までの間、充実した内容を誇った。

その内容とは文芸時評、新刊・雑誌批評、

文壇消息、俳句・短歌、似顔絵、連載読み物、詩歌、海外事情等、多岐に渡る。編集部には千葉亀雄、菊池寛、牧野信一、佐佐木茂索らが在籍し、その充実を図った新聞である。

このような背景から、『時事新報』は文芸欄を中心に、文学に関する評論・随筆・小説等の文芸テキストや、作家の消息などトリビアルなゴシップが数多く掲載されている。

したがって、その情報は、さまざまな文学研究素材の宝庫であり、文学生成の場を考察する手がかりとなるだけでなく、この新聞に掲載された情報自体を目録化するなどして公開していけば、他の研究者や評論家などによる活用も見込まれ、いわば公益性が高い研究となると考えられた。

また、文学と隣接する諸文化領域に関する情報を豊富に含んでいることが分かった。それらにも目を配り、広く昭和初期の文化の中における文学の位置を考察することが重要な目的であると考えられた。

3. 研究の方法

ここでは、研究の具体的な方法について述べつつ、本研究を通して得た、今後の研究の方向性についての問題意識をも記しておくこととした。

1、2で述べたような研究のためにもっとも大切なことは、『時事新報』という資料体を本研究遂行者自身だけでなく、他の日本近・現代文学研究者、あるいは歴史・文化等の研究を行っている方々の考察に資するよう、網羅的な目録を作成することであると本研究グループでは考えた。

そこで本研究においては、研究代表者自身がきちんと『時事新報』の紙面に目を通し、その中から文学や文化に関する情報をピックアップするという、いささか手間のかかる作業をかならず行った上で目録を作成することとした。

具体的には、マイクロフィルムから関連するデータ（記事・広告とも）を有するページをピックアップし、紙にプリントアウトした上で内容を一読し、確認の上で、謝金を用いて雇用した人にデータ（記事のタイトル、記事内に出てくる文化人の名前、キーワード等）の入力を依頼し、それをふたたびプリントアウトした紙面と見比べて確認を取った。

その最中に気付かされたことがある。それは、新聞メディア（少なくとも『時事新報』）における〈文学〉の位置づけは、隣接する諸ジャンル、ことに〈文化〉のなかに含まれており、そのなかでの〈文学〉の比重は1年程度の間でもだいぶ変化しているということである。

それは、このように記してみればごく当た

り前のことではある。新聞の場合、紙面上の制約があり、たとえば映画に関する読者の関心が高まれば、どうしても限られた紙面の中で文学に関する情報は少なくなる。つまり、紙面の割り付けが、同時代の文化的関心のありようを紙面の面積が指し示しているのである。

また、同時期は、昭和モダニズムとも続賞されるように、映画やラジオが勃興し、また女性の活躍に注目が集まった時期でもある。同時代の文学作品が原作の映画が次々と公開されたり、作家がラジオ内で講演したりと、該当する研究領域の人が見れば、相当に有益な情報がそこには含まれている。

また、家庭欄などに見られる女性関係の記事などは、ジェンダー論や社会学にとって有益な情報を含んでいると本研究グループは考えた。

そこで本研究に於いては、申請時点での目標であった、通時的に昭和期における〈文学〉情報のみの動向を追うと言う方向を変化させ、共時的に幅広く〈文化〉との相関関係に於いて〈文学〉の位置付けをはかると言う方向に方針を変更することとした。

まずは実質上、昭和の最初の年である1927年（昭和2年）について『時事新報』を通覧し、その目録の作成に取り組んだ。その際には、研究分担者のパソコンやデータベースに関する豊富な知識が功を奏し、謝金を用いて作業を分担させることができた。

そして、このようにして作成したデータをもとに、研究代表者と研究分担者が、それぞれの関心と重ね合わせて研究を行い、論文等を通じて公開することとした。現時点でのその代表的な成果は本報告書「4」に記載した通りであり、今後も継続的に論文等を発表する蓄積が確保された。

その作業を通じて、研究グループが痛感した問題点がある。それは、『時事新報』は東京を中心とした新聞であり、その情報は不可避的に東京中心のものであるということである。

ことに、資料体としたマイクロフィルム版が東京で売られていたものであることは、広告の内容や、定期購読の申込所の記載から間違いないところであるが、そのことは広く同時代の〈文化〉を知る上で、地方の問題を置き去りにすることになりかねないという危惧があることがわかった。

また、1927年（昭和2年）の新聞紙面における最大級のトピックは、当時の日本社会を覆う流行現象であった「円本」ブームである。円本の多くは東京の出版社で発行されたが、広告代理店を介在させ、全国各地でプロモーション事業を行ったことと、その詳細な内容が近年の研究から明らかになっている。

それらのことから考えたことは、本研究が取り上げる「文化」なり「文学」なりの情報の伝達性を、都市と地方とのキャッチボールとして理解し、分析の際に考慮する必要性である。

そこで杉山は、地方紙の状況についても調べてみることにした。

幸いなことに、いくつかの偶然から、秋田県の新聞と文学について調べる機会に恵まれたため、主に現在『秋田魁新報』として存続している新聞の通史的な側面や、その文学や文化との関連とを調べることにした。これについて、一定の研究上の蓄積を得ることができた。この成果の一端は、近刊の文学事典のなかに組み込まれる形で公開する予定であり、なおも調査・研究の継続が必要であると考えている。

また、同様の認識は研究分担者にも共有されている。竹本は、山村暮鳥の文学碑建立をめぐる地方文壇の状況の解明についての研究を進め、「5」に記載した論考など複数編を公にした。

本研究における公開済みの成果は本報告書の「5」に記載してあるが、中心的な作業となる『時事新報』文化関連記事目録の公開は、掲載媒体の制約もあってひとまず三ヶ月分の公開に留まった。

しかしこのような公開手段では発表に時間がかかり、研究状況の進展に取り残されてしまう恐れがある。費用面等の問題はあがあるが、1927年の残る9ヶ月分は一気に書籍化できればと考え、その方法を現在模索している最中である。

なお、今後の研究の進展を図るために本研究グループは、いくつかの研究グループと意見交換やシンポジウムの共催といった機会を設けた。

ひとつは『時事新報』の大阪版とも言える『大阪時事新報記事目録』を刊行した関西大学の研究グループである。その中心メンバーと意見交換を行って、今後の協力体制の構築を図った。

また、「5」に記載したシンポジウムの共催を通して、改造社を研究している別の科研究グループ（「1920年代出版メディアに於ける「円本」戦略とその展開に関する研究」研究代表者：庄司達也）のメンバーと意見交換を行った。

これらによって、今後の協力体制と研究推進のメンバー構築を図ることができた。

4. 研究成果

まず、本研究の中心的な課題である『時事新報』の文化関係情報の目録作成について。目録については1927年1～3月分の

みではあるが、成果を目録として公開することができた。(杉山欣也・竹本寛秋「『時事新報』文化関連記事目録 一九二七(昭和2)年一月」(『金沢大学歴史言語文化学系論集言語文学篇第4号』)と杉山欣也「『時事新報』文化関連記事目録 一九二七(昭和2)年二～三月」(『金沢大学歴史言語文化学系論集言語文学篇第5号』)である。これについては、ある程度まとまった時点での刊行について、はやくも出版社より声がかかるなど、大きな反響を得ている。

以下しばらく、この目録自体では紙幅の都合もあって触れることのできなかつた当該時期の概況を記したい。

1927年1月については、大正天皇の葬儀に伴う記事、2～3月については服喪ムードが薄れたためか映画や演劇に関連する記事や広告が目立つ。また、3月7日に発生した北丹後地震の報道と、そのことが関東大震災の記憶を想起したためか、この時期に笑いに関する情報が押さえられている傾向をも読み取ることができた。

この、服喪ムードや震災による自粛傾向をもっとも如実に反映しているのは、『時事新報』の日曜付録として大正期に人気を博していた「時事漫画」(北沢楽天主権)である。そのページは徐々に圧縮され、内容的にも批評性が弱くなっており、その魅力を失いつけていることが分かる。

また、3ヶ月間に通じているのは、スポーツに関わる記事が文芸関係と同ページに並び、スポーツ記事が徐々に紙面における比率を増していく一方で、文学に関連する記事は、たとえば大正中期のそれと比べて居場所を狭くしているという問題である。

一方、上記の目録においては「記事目録」としたため割愛したが、広告においては、改造社の『現代日本文学全集』を筆頭に、各種「円本」広告が並んでいる。これに伴って、記事内容においても円本ブームを揶揄するようなものや、ゴシップなどが目立つようになってくる。

また、普通選挙法と治安維持法が制定され、初の普通選挙を控えた時期であることから、出版物に関する取締の法案が上程される。そのことに関する報道や出版社・新聞社の対応もこれらからはつぶさに読み取ることができる。それは「円本」ブームと平行な現象として認識しよう。

そのことについては、同時期の改造社と円本について調査考察を行っている別の科研費グループ(「1920年代出版メディアに於ける「円本」戦略とその展開に関する研究」研究代表者:庄司達也)と共催の形で、合同シンポジウム『「円本」、地域、文学」(2013年3月24日、於・新庁舎記念文学館(秋田県仙北市角館町))を開催し、本研究から

は研究代表者の杉山欣也が発表を行った。

杉山が行った発表の内容は、代表的な円本である『現代日本文学全集』(改造社)における伏字の実態を調査し、『現代日本文学全集』が参照したテキストの同定をいくつかの作品におこなった上で、昭和2年当時の国会論戦やマスメディア上で問題となっていた出版権法ほかの上程問題の影響を『時事新報』の記事における論調の推移から考察しようとするものであった。

なお、本発表については、『秋田魁新報』2013年3月28日朝刊に「円本」の功績を考察 仙北市でシンポ 宣伝に着目「画期的」という記事として掲載されるなどの反響を得ており、また、隣接する研究を行っている研究グループとの連携を図ることができたことは、今後の研究の進展のためには大きな収穫であったといえる。

また、「3」でも記したように、地方との情報の相関関係を意識するようになったため、上記のような事情もあって、本研究代表者が秋田県の新聞と文学の状況についても考察をはじめた。その成果の一部は近刊『東北近代文学大事典』(勉誠出版)に収録されることになっている。

また、研究分担者である竹本寛秋においては、自らの主たる研究対象である大正～昭和初期にかけての「詩」概念の考察に本研究で培った知識と見識を投入して、複数の論考を発表した。これらは、山村暮鳥と彼に関連する地域における文学場の生成過程を考察した点において、やはり地方との関わりで文学を考察するという観点を有しており、本研究の方向性を強く推進したものである。

今後の研究の方向性としては、さらに『時事新報』文化関連記事目録の作成を継続し、ある程度の時期が来たら(おそらく、これまでの分量から見て一年分と予想される)、出版のかたちでこれを公開し、多くの研究者の便宜を図るようにしたいと考えている。これはすでに出版社から声をかけていただいていることもあり、できるだけはやく実行に移したいし、また実現可能性も高いと考えている。

なおその際には、索引や検索等の機能をよく研究し、利用者の利便を追究したものになりたい。それについては、研究分担者の今後の研究開発を期待している。

また、期間内に得た「地方」という観点を取り込み、複眼的な視野から対象となる情報を考察していきたい。先述のように、資料体となる『時事新報』が東京近郊で出されていた紙面であることを考えると、他の地方の同時期における「文学」「文化」情報の扱い方との差異を比較することは、有益な手段であると考えられる。

たとえばその際には、先述のように、『時

事新報』の大阪版である『大阪時事新報』を研究し、『大阪時事新報記事目録』を刊行している関西大学のグループ、あるいはやはり先述のシンポジウムを共催した改造社の研究グループ連携を図るなどして、組織の拡大に努めたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 杉山欣也, 「時事新報」文化関連記事目録 一九二七(昭和2)年二～三月2013, 金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇, 査読無, 第5号, 43-104
- ② 杉山欣也, 竹本寛秋, 「時事新報」文化関連記事目録 一九二七(昭和2)年一月, 2012, 金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇, 査読無, 第4号, 1-31
- ③ 竹本寛秋, 大洗の山村暮鳥詩碑建立, 雲, 査読無, 第17号, 2012, 17-37頁

[学会発表] (計1件)

- ① 杉山欣也, 『現代日本文学全集』における伏字調査(中間報告)-円本と検閲をめぐって, シンポジウム『円本』、地域、文学, 2013年3月24日, 仙北市新潮社記念文学館(秋田県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉山 欣也 (SUGIYAMA KINYA)
金沢大学・歴史言語文化学系・准教授
研究者番号: 90547077

(2) 研究分担者

竹本 寛秋 (TAKEMOTO HIROAKI)
鹿児島県短期大学・その他部局等・
准教授
研究者番号: 20552144